

萩原朔太郎先生を憶ふ

田 中 克 己

・昭南島にゐた時のこと、たしか五月の終りのことだつたと思ふが、自分は海岸通りの大坂毎日新聞の昭南支局に行つた。そこには内地から送られた新聞の綴りがあつてそれを見るのが戦地にゐる人間にとつては大變な楽しみなのである。さうして何氣なくくりひろげてゐる中に目についたのは萩原先生御逝去の記事であつた。

それより先にも白鳥庫吉先生、佐藤惣之助氏の御逝去のことは同盟ニュースを通じて知つてゐた。何れも亡くなられて二日とたぬ内に知つたのであるが、萩原先生の方は無電で來なかつたので、この時はじめて知つたわけである。

この時の氣持は丸山薫氏あてにスマトラから送つた三

首の歌で、拙いながら記したつもりである。

海青き南の國土くににわがありて萩原大人の訃報を聞く

も

海の風吹き通るとき擴げぬし新聞に見る凶まのまがご

と

わが來しはふるさとのひと恙なくまさきくあれと念

じつゝ來し

戦地で聞く内地の便りの中で、最も聞きたくないのは不幸の便りである。自分の生命のことは今更惜む氣持は毛頭ない。その代り内地の人が幸せて元氣であることのみを念じてゐるのである。闇取引をしたり、日本人同士で喧嘩したりしてゐるといふ便りほど戦士の心を痛める

ものはない。四月十八日の東京空襲も我々の心を痛ましめたが、それは直ぐと大したことがないことがわかり、その時の嬉しさつたらなかつた。しかし萩原先生の亡くなられたことだけは疑ふことが出來ず、その後すぐスマトラへ行つてからも自分は忘れることが出來なかつた。

暑苦しい部屋で机に向ひ先生のことを五枚書き六枚書きして、書き切れずに筆を措いてしまつた時の口惜しさ、お葬式に女房が代理で行つて呉れた由はずつと後の家信で知つたが、もとよりそれで満足出來る筈もなかつた。それからまた數週して、内地からの便りがついた。その中に葉書が一枚あり、先生御自筆のものであることは疑ひなかつたから、この時の氣持も泣き笑ひであつた。

「御近況想像して美しく存じます。いつか御令閨が遠方から土産を持つて見舞に來られ御厚志恐縮しました。小生の病氣その後追々悪化し、目下は病床中に絶體安靜、萬事人手を借りてゐる仕末、醫師からは重態を宣告されてゐる有様、日夜の苦惱、床中で泣きわめいてる慘狀、御哀憫下さい。」

日附は四月二十六日、恐らく先生の御絶筆に近いものと思ふ。

しかしそれよりも尙ほ悲しかつたのは歸還後、自宅に保存されてあつた二月十日付の自分宛ての御手紙を拜讀したことであつた。先生の御病狀はこの手紙に一層よくあらはれてゐる。

「寒中御見舞ひ申上げます。

「四季」二月號の編輯後記を拜見。君を始め同人諸君に御心配をかけて居る様子で、たいへん恐縮に存じます。小生の病氣も舊冬以來大分長びいて居ますが、別に憂慮すべき状態ではなく、ただ一種の習性的な全身衰弱症で、いはば虚脱ともいふべきものです。しかし身體非常（に？）疲勞し、夜間睡眠困難で晝間も常にうとうとして居る有様で、神經衰弱のため、いつも目まひがして呼吸が苦しく、そのため一步も外出ができません。醫者は轉地をすすめますが、今の状態では、あの壽司詰めの満員列車に乗ることはとても恐ろしくて出來ません。訪問客と對話することも非常に苦しく、五分もすると目まひがして倒れさうになるので、用件の客にも一切逢はず、面會謝拒を續けて居ます。一日の中の大半は寢床に居て、時々炬燵にあたる外、何物も爲すに暮して居ます。ただ睡眠藥の代用とし

て、酒だけは毎夜床中で飲んで居ますが、それも近頃は手に入らないで困つて居ます。君の方で御都合がございましたら、少々御配慮していただけると有りがたい。……

この續きには小生の「楊貴妃とクレオパトラ」の讀後感を記され、透谷賞に推薦して下さつたことが記されてある。

この時自分は既に從軍してをり、そのことをお便りする由もなかつたので、先生はかういふことを云つて來られたのであるが、愚妻は歸來この御手紙により、自分宛の配給の酒若干をお届けした由である。もちろんこれも歸還後はじめて知つた話である。

先生との御縁は實に薄かつた。始めてお目にかゝつたのが、昭和十一年だつたかに先生御下阪の折、伊東靜雄、小高根二郎の二君とお話する機を持つたことだが、先生は初対面の人間には非常にはにかまれるたちゆゑ殆どお話申上げることもなく、早々にお別れした。昭和十三年に東京へ移住した後もなかく御目にかゝる機會を得ず、やつとパノンの會を機會としてお話申上げることとなつたのである。この會は先生が若い詩人たちとの話

の機會を持たれるために發議されたもので、丸山、津村の諸氏が助手格、自分もその中に加はつていろいろとお話を伺つたのである。

この時のエピソードも澤山あるが、いつかゆつくり書きたいと思ふ。これより一寸前のことだつたと思ふが、三好達治氏と話しながら萩原先生の詩は讀んだことがないと云ふと、三好氏果然として、「そんな詩人があつたか」と何度もくも云ふ。實際自分が萩原先生の詩を讀み出したのは、この會で先生が好きになり出してからで、その後、「宿命」の刊行があつてやつと大體、先生の詩に通じたといふのが真相である。

これは自分にとつては却つて幸せなことだつたやうにも思ふ。先生の詩を感じ易い少年の日から讀んでゐれば、自分は恐らく先生のエピソードになり畢つてゐたであらう。虚無と廢頽、これ位、少年のころを動かす恐ろしいものはない。しかし自分はそれから免れ得たのである。

しかし虚無と廢頽といへば語弊がある。先生の詩にはその底に焼けるほど熱い心情と、眞摯さがあつた。先生の廢頽は理想をもたぬ濁れる社會への反抗であり、先

生の虚無は虚禮と形式一點張りの俗人への反抗であつたのだ。しかし少年の無智無經驗な頭腦にそのことがわかるまでには何年が必要だつたらう。そしてそれがわからぬ中に自分は詩を作らず、詩を讀まぬ完全なる俗人になり畢つてゐたことであらう。

自分が南方へ從軍してゐることを知られてからの前述

のお便りに「美しい」といふことばがある。眞の愛國者であつた先生にはほんとに皇軍の武威と、愛すべき現住民とをお見せしたかつた。先生が早くから知つてをられた大御稜威を自分は從軍してやつと眞に知り得たのである。(歸還後の第一筆としてこれを書く。)

受付
18.1.19
式原公認

1174

昭和八年九月二十六日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十七年十二月二十七日印刷納本昭和十八年一月一日發行

コギト 第十二卷第一號 第二百二十六號

⊕ 定價三十錢

コギト 昭和十八年一月號

昭和八年九月二十六日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十七年十二月二十七日印刷納本昭和十八年一月一日發行

コギト 第十二卷第一號 第二百二十六號

トギコ

號 月 一





コギト 目次 第百二十六號 (昭和十八年一月)

年頭謹記	保田與重郎	二
シンガポール攻略	田中克己	四
山間の村	池澤茂	六
萩原朔太郎先生を憶ふ	田中克己	三
燈臺のある町へ	小高根二郎	六